満月の夜

今年の中秋の名月（十五夜。旧暦の8月15日）は、9月14日で、満月が見えるはずでしたが、あいにく曇り空になってしまい、満月を見ることができませんでした。

先日、昔話でお月見の話題が出たときに、子どもの頃のお月見の夜はわらと縄で棒状のバッタリを作り、近所の子どもたちが連れ立って、「大麦バッタリ、そば当たれ」と言いながら各家庭を廻り、庭先でバッタンバッタン叩いて手作り饅頭等を貰って歩く風習があったが、それも昭和25年頃には途絶えてしまい、お月見も寂しい気がするという話になりました。

そこで、ああ今日が旧暦8月の十五夜のお月見さんだというときに、昔を懐かしみながらお月見の準備をしようとしたのですが、ススキを取りに行く時刻から空が暗くなり始め、満月が見られるような状況ではなくなってしまいました。

満月の話は農業とも関連して言われることがあり、そばの花盛りが満月に当たると不作であるなどとも言われておりますが、私は以前に旧暦8月の十五夜の真夜中になると竹の節は凹凸状態がなくなり、水平になると聞かされたことがありました。その話は本当なのかと県の伝統工芸展で竹細工師の方に質問したところ、「わからない」と返事が返ってきました。さて、それでは自ら実証しようと意気込んで、十五夜の日、寝る前にのこぎりとなたを用意して竹山入りの準備をしました。いよいよ「かぐや姫」が現れるか、はたまた満月の夜天女が空を舞うか、というところまでいきましたが、目が覚めたのが午前1時を過ぎ、雨も降っていたので実証中止となりました。

どなたかそのような竹についての余話をご存知の方おりませんでしょうか。今年の満月の夜の話です。

文芸しろさと

俳句

雨あとの虹の短し茜雲　山崎　正行

鮎の川鉱泉宿へ二つ越え　飯田　勇一

鬼やんまためらひて門くぐりけり　高橋　芦江

流木は寝そべる形秋高し　鯉渕　寿美恵

歩く会ポケットの柚子匂ひけり　仲田　まちゑ

郭公の声して湖の暮れにけり　森　静江

秋蝉のひた止み激し雨来るか　今瀬　多代美

菊咲いて父より大き歩幅なり　竹内　幸子

蜩のうるさき程の住み家なり　飯村　昭子

ハンバーグ黒く焦がして夏惜しむ　いそべ　きよ

盆祭過ぎて金魚を買ひにけり　飯村　愛子

虫すだくそれぞれにある好きな事　中野　千賀子

竹のオブジェに灯を点しけり終戦日　田所　厚子

眠さうな山鳩の声稲の花　瀬谷　博子

うれしがる稲豊作の指数載る　岩下　金司

下野の花も僅かに紅と白　田口　勝元

秋風や新米供えお中日　東見　登美子

来る日毎花と語れる秋の入り　富田　欽子

短歌

草を引く手を止め宙を見上ぐれば
ハンググライダー北を指しゆく　所　美恵子

紫陽花に梅雨の雨降り濡れたれ
ばむらさき更に色濃く変はる　青柳　京子

教え子たち夫の葬儀に馳せく
れぬ愛育教師の成果見るべし　山形　式妙

小さき花寄り添ふ白き紫陽花
のひとつひとつに淡き影もつ　渡辺　千紗子

青田より吹き上ぐる風酷暑の日
も家開け放せば吹きぬける涼　秋山　愛子

ほとばしる汗に一日を過ごし
来て風なき今宵の疲労著しく　大森　久子

御詠歌を唱ふれば心静もりて
浄土に座する思ひに浸る　佐川　あや

明日在るを信じて明日着る服
を寝しなに揃え今宵も寝ぬる　杉山　みちこ

老いの身を労はりにつつ畑に
立つ命ある実は吾の分身　宮本　ふみ江

なにげなく雨戸開ければ秋の
風月は東に虫の声する　阿良山　ウメノ

国会は残暑の如く厳しかり福
田内閣辞任表明　仲田　こう

庭先にピンクの花のサルスベ
リ心なごます良き花なれり　岩下　美知野

遠き峰夕焼け染めて日は沈む
初秋の風はさやかに吹きぬ　岩下　通子

窓開けて涼風吹いて「せみ」
の鳴く青葉に風の朝の一時　市川　義子

古代蓮は台座思わする葉をかさ
ね花も雅びなり仏陀おわすごと　枝不　美

信じたくなき事ばかりが載りてゐ
る今日の新聞もて泥靴を拭けり　片見　和枝

赤燃ゆる桧原湖の黄葉なつかし
く偲びつつ雨の湖水ながむる　川上　千代子

八月の猛暑音なき刻ありて湧
きくる雲に平和を祈る　島　愛子

一秒の百分の一を縮めたる北
島の58秒91は世界に冠たり　多田　志保子

はなれ住む男孫二人はそれぞ
れに司法と税理の道歩み初む　坪井　きよ子

初採りの茗荷も入れて食むうど
ん盆の夕餉を子孫らと共に　萩谷　登喜子

のぼりゆく国旗を仰ぐ選手等
の誇らしき顔満ちたれる顔　冨田　佐智子

川柳

脱メタボきのこヘルシー油とり　青木　新三郎

稲揺れて夕日を浴びてトンボ飛ぶ　永井　英陽

秋の空サンマ一匹泳いでる　中島　芳春

朝メジャー昼甲子園夜五輪　山本　隆荘

訂正

広報しろさと9月号14頁、多田志保子さんの短歌は、「孟宗の若竹に触れ背を整す気を貰ひたり竹叢のみち」の誤りでした。お詫びして訂正します。